

## 優秀賞

### 「優しい社会に」

登米市立南方中学校 二年 鹿野 かの 朝陽 あさひ

夏休みが終わる頃、家族で必ず観るのが「二十四時間テレビ」だ。私が小さい頃から毎年観ていると母は言っていた。もちろん募金もしている。小さい頃から募金の呼びかけをしている人の姿を見て、自分もいつか参加してみたいとずっと思っていた。

そのチャンスが今年の夏休みだった。Jボラ体験隊の項目の中に「二十四時間テレビ募金活動」があり、「やってみてい！」と思い友達と一緒に参加することにした。

募金活動をするのは初めてだった。もちろんボランティア活動に参加すること自体、初めてのことである。「二十四時間テレビ」の募金活動のお手伝いができると思うと胸がわくわくしてきた。

たくさんの人に募金してもらうためにはどうしたらよいか自分なりに三つ考えてみた。

一つ目は大きな声で明るく呼びかけることである。そうしたら、快く募金してくれるだろうと思った。二つ目は、通りかかる人の目を見て、声をかけることだ。そうすれば、私たちの気持ちが伝わりやすくなると思った。三つ目は、しつこ

く強制的な感じを相手に与えないことだ。通る人が募金をしようという気持ちになるように、そして私たちの気持ちが伝わるような態度で呼びかけようと思った。

募金活動当日、最初に募金してくれたのは孫を連れた老夫婦だった。優しそうなお二人は、孫と一緒に募金箱にお金を入れてくれた。そして、

「おつかれさま、頑張ってたね。」

と言い、にっこりほほ笑んでくれた。私はうれしくなり、

「ありがとうございます！」

と心からお礼の言葉がでてきた。

私たちの前を通る度に募金してくれた人もいた。小さい子どもを連れのお母さんは、子どもにお金を渡して募金をしてくれた。募金してもらったたびに、温かい言葉をかけられ、それが私のやる気につながり、疲れなど吹っ飛ばしてくれた。

しかし、その反面、通りかかる人に疑問や不満を持つようになった。私たちが一生懸命呼びかけているのに目も合わさずに素通りしていく人や、私達の前を通らないようにしている人、何度も前を通りながら知らん顔している人などに対してだ。

「募金」とは「お金を寄付」する行為だ。困っている人のために自分にできる支援をすることはよいことだと誰もが知っているぶん、募金活動をする姿を見たら、しなければなら

ない気持ちになると思う。だからといって、必ず募金をしなければならぬというわけではない。お金は届けられなくても、応援しているという気持ちは届けられるのではないか。だから、自分は関係がないというそぶりはやめてほしいと思う。

私は、「二十四時間テレビ」の募金活動を通して、たくさんの人と出会うことができた。そして、目の前の課題に対して、どうすることが必要なのか、大切なかをじっくり考える機会にもなった。

どうしたら募金箱を見てくれるかと友達と一緒に考え、アイデアを出し合い、話し合った。それは、一人一人が力を合わせて活動できたという達成感となった。また、たくさんの方々に呼びかけ、募金してくれた時の感謝の気持ち、「おつかれさま、ありがとう」と言葉をたくさんかけてもらった時の喜びと感動も味わうことができた。

ボランティア活動には、報酬や金銭的な見返りはない。しかし、それ以上に、私自身にとつての収穫は大きかった。

それは、まわりの方々から温かい言葉をたくさんいただいたことだ。温かい言葉をかけられると、お互いに心地良い気持ちになる。今回のボランティア活動において、温かい言葉の力は大きかった。

「ありがとう」「ごくろうさま」「頑張ってるね」「大変だ

けどお願いします」などの言葉をかけられ、心がほんわりと温かくなったことを思い出す。ちょっとした気遣いや励ましの言葉もそうである。

私達の社会には、自然保護、福祉、人権、貧困など、様々な課題がある。こうした課題を改善していくには、一人一人が考えること、協力することが大切だとボランティア活動を通して学んだ。

社会の全ての人々が、温かい心で、温かい言葉をかけ合いながら、優しい社会になればと願う。